

# 提携米通信

2021年4月号・黒瀬農舎

上野の桜が満開になれば、我が家の庭に福寿草が咲く。



庭の福寿草が満開です。2021.3.25撮影  
10年余りに隣町の山から移植した福寿草。  
咲き始めると、春作業がスタートです。

新聞テレビによれば、今年の桜は関東でも、関西でもどこも開花が早いようです。

北国・秋田の桜も蕾がすこし丸く膨らんできた気がしますが、開花がいつになるかはまだ判りません。

毎年、上野公園の桜の便りが来る頃は、北国の当地では、福寿草が咲き始めます。

今年の冬は「秋田は記録的な豪雪！」と報じられましたが、これは、県の内陸部に限ったことで、沿岸部の当地は、暖冬続きの近年の中では、雪が降ったものの、除雪機の出動は数回に止まり「北国秋田」は「必ずしも雪国」とは言えなくなってきました。

ところで、先の通信でお伝えしていますが、この冬は作業場で、日曜日以外毎日、鉄鋼工作や農機改良工作、電気工事などに精を出しました。

雪はさほどでもなかったものの、この冬の寒さは格別厳しく、暖房灯油の消費が予想以上に増え、もったいなくて、途中で一日作業を中断し、ガスボンベなど廃材を使って廃油ストーブを作りました。

自作廃油ストーブは、煙を出さずほぼ完全燃焼するという期待を超える出来栄でしたが、これに使う「廃油」は、トラクターなど農機エンジンや車のエンジンオイルの廃油です。

この廃油は、一日に20ℓ近く必要なため、自家廃油の蓄えはすぐに尽き、来冬は、付近の知人友人から集めようと思っています。

大型の種籾発芽機、暗渠掘削機、水田除草機、苗箱収納コンテナ、ホークリフトのラジエターの交換、バックホーのウォーターポンプの交換などなど幾つも行き、これらみなほぼ期待通りにできました。でも、実際使ったの合否は、これからのお楽しみです。

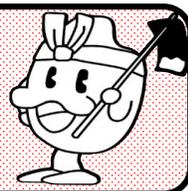
## 提携米 黒瀬農舎

〒010-0445

秋田県南秋田郡大湯村西1丁目4の7

### 黒瀬 正・友基

TEL:0185-45-3088 FAX:45-2887



E-mail: [akita@kurose.com](mailto:akita@kurose.com) Web: [提携米 黒瀬農舎](#) [検索](#)

★定期購入の場合も、変更や前倒しの出荷、休止はいつでも対応いたします。  
変更や休止は次のお米のお届けの5日ほど前までにご連絡下さい。  
★お米のご贈答利用も宜しくお願いたします。

★電話は土日祝日も含めて朝8時～夜8時頃まで対応致します（自宅兼事務所）。但し、電話受付の専任スタッフはいないため田圃や倉庫作業、外出の時は留守番電話対応となります。ご了承願います。

また、メールもぜひご利用下さい。なおメールは原則すべて返信していますので、返信メールが届かない際は自動的に迷惑メールとなっている可能性があります。迷惑メールやメールの設定をご確認下さい。

## ヤブオクで20万円で入手したボロバックホーで、苗場の暗渠施行中。

いよいよ春の農作業のスタートです。

今年屋外での最初の仕事は、苗を育てる苗場の暗渠施行となりました。



**苗場の暗渠施行** 2021.3.29撮影  
50センチ余りの溝を掘り、底に塩ビパイプを敷いて敷地の排水強化。

稲の育苗は、種籾を播いた苗箱を、ビニールハウスに並べ、畑状態で育てるのが最近では一般的になっています。

この方式の育苗は、ビニールハウスで保温されるため、春の寒さを防ぐなどの利点があります。

でも、暖かいことと、畑状態での育苗のため好気性細菌の繁殖が活発となり、病気がでやすいという欠点があります。

そのため、殺菌剤を床土に混ぜたり、灌水時の水に農薬を混ぜ、病気の発生を防ぐことが栽培基準化されており、農家は幾種類もの農薬を苗に使います。

我が農舎のように有機や農薬を使わない栽培であっても、ハウス育苗方式を行う方もおられますが、この場合は、晴天で太陽が照る日は、ビニールの開閉をこまめに行って、室温が上がり、病原菌が繁殖しないようにするなど名人芸とも言える緻密な管理が要求されます。

そこで、我が農舎をはじめ、多くの有機無農薬栽培の農家は「プール育苗方式」を取り入れていることが多いです。

プール育苗は、ビニールハウスを建てず、屋外で、ビニールシートを敷き、5センチ程度の浅い水溜りの中に苗箱を並べ、苗を育てる方式です。

この方式だと、生育は4、5日遅れますが、温度が低く保たれることと、水を張っているため、苗床は嫌気状態になり好気性細菌の繁殖がなく、苗に出る大半の病気の発生が抑えられるという利点があります。

この栽培方式は、私や有機生産者が特別に開発した訳ではなく、以前からある方法です。

田植え機用の苗箱育苗方法が始まった頃には、稲の育苗にビニールハウスを使うということはありませんでした。一般的には、水田の一面に苗場を作って、水を張った苗床に苗箱を並べ育苗されていたのです。この延長線上のアレンジ技術が「プール育苗方式」です。

今月の下旬には、種蒔きを始めるので、それに先立ち、今まで使っていた苗場の排水が悪く、苗運びなどに支障があったので、その対策を行ったという次第です。

戦後の食糧不足の昭和24年から、米が余ようになった昭和44年まで20年間続いた朝日新聞主催の多収穫競争事業「**米作日本一**」は当時日本中の米農家に親しまれた大イベントでした。

最初の頃の優勝者や上位入賞者は、**関西以西の暖地の農家ばかり**でした。ところが、中盤以降の上位入賞者はどんどん北上し、最後の頃は、**秋田や青森など本州北端の農家が大半**を占めるようになりました。

この理由は、**稲作技術の大革新**ですが、これが農政史の中で余り語られていないことは残念です。

それは「**保温折衷苗代技術**」の出現です。開発者は、確か長野県の篤農家だったとか。

寒い地方では、苗場の水温が暖くなるまで、種蒔きができなかった。

種蒔きが遅いと、田植えも遅くなる。稲の穂が出る時期も遅れる。**十分に稔るよりも早く寒くなる。よって北国は収穫量が少なかった。**この技術の出現で、**作期繰り上げの大革新**ができたのです。

ポリエチレンもビニールもない時代。油を染み込ませた紙が提灯や番傘に使われていました。この油紙を活用。**①油紙を苗床に掛けて保温 ②苗床の溝に水を浅く張って保温（畑苗代と水苗代の折衷）**この2つで寒さを防ぎ作期を半月早める**保温折衷苗代**を発案した偉人の農民がおられたのです。